

戦前の大学講義録に対する独学者の意識に関する一考察

—田中穂積らの講義録受講経験と校外教育実践を中心として—

関 本 仁

はじめに

筆者は、戦前における大学講義録（通信教育）を用いて自学自習を行っていた人々の「学びに対する考え方」が如何なるものであったのかを掘り起こしていくことをテーマとしている。講義録による学習を行っていた者たちがどのようにして学を志し、どのように学び、どのように自らが学んだ事柄をその後の彼らの人生に生かしていったのか。特に本稿では講義録を学習し、その後には教育を行う立場となった人々について分析、考察していくことが本稿の目的である。

先行研究としては、田中征男『大学拡張運動の歴史的研究—明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』や竹内洋『立身出世主義[増補版]—近代日本のロマンと欲望』などの論考があるが、これらにおいては制度としての講義録の側面に多く力点が置かれたものであり、また一方で菅原亮芳は、「近代日本における青年と学校という視点から日本近代学校の構造的・機能的性格を明らかにする立場に立って見たとき、青年たちの進学要求を方向付けていたと思われる、これら進学案内書群に目を向けていかなければならないと考える。⁽¹⁾」と指摘しているが、そこで取り上げられているのは専門学校入学者検定試験、つまり、「専検」を視野に入れた受験勉強の色彩が強い。本稿は、受験という明確な目的を持った学習活動に注目するのではなく、あくまでも「学習という営み」そのものを主眼としていく。

まず、戦前における教育雑誌、新聞記事等を用いて当時の時代を取り巻く「独学による学習」の様相が独学者達自身にとってどのように映っていたのかを把握しつつ、講義録による学習を行っていた者たちがどのようにして学を志し、どのように学んでいたのかについて分析・考察を試みる。

本稿では戦前において数多く出版された大学講義録のうち、開始した1890（明治23）年から、受講者が現時点で把握できている1926（大正15）年に至るまで、のべ1648379人⁽²⁾という、非常に多くの受講者を生み出していた早稲田大学（東京専門学校）から出版された講義録、特に高等教育レベルの学習内容を扱っていた『政治経済講義録』を主として取り上げる。『『早稲田大学講義録』を学ぶ人たちの「学びに対する考え方」はどのようなものであったのか』を掘り起こす一つの事例として、＜学んだことをどのように生かすことができたのか＞を追うことが比較的可能であると思われる人物にまず焦点を当てて分析しようと考えている。そこで、本稿は早稲田大学の講義録で学び、のちに総長に就任した田中穂積という人物を主に取り上げる。彼が早稲田大学講義録に対してどのような立場

／見方を持っていたのかを検証することが本稿の目的である。資料としては、田中が早稲田大学総長に在任していた期間における記述を中心として、その他の講義録、さらにその他の講義録受講経験者のなどの記述等もふまえて考察したい。なお、本稿で参照している『早稲田大学講義録＜内容見本＞』とは、それぞれの「科」（現在の大学における学部のような区分けがなされている）のカリキュラムや受講経験者・受講者たちの声などがまとめられた、入学案内のようなものである。田中が大学経営に携わる中で講義録をはじめとする校外教育事業にいかに関与していったのか、という点をみても重要であると考えている。

なお、田中穂積の総長在任期間は1931（昭和6）年から没年となる1939（昭和14）年にかけてである。ファシズムが台頭し、総長就任の年に満州事変が起きたという状況であり、特に太平洋戦争の開戦が近づくにつれ、植民地支配等への言及が増えていくことを見て取ることが出来る。しかし本稿では、田中穂積が講義録、ひいては独学についてどのような考えを持っていたのかを検証する事を主眼としており、あくまでも講義録・自学自習についての記述を検証していくものとする。

1. 独学者を取り巻く状況

1891（明治24）年6月の教育時論223号によれば、「今日私立の学校にては、各講師が日々講義する所を筆記し、講義録として出版し、これを校外生に販売し、法律、政治、歴史、教育等の諸学科を学ばしむ。此事たる学校に入ること能はざるもの、為には、甚だ便利なる法にして学問を普及するの利あるべし。⁽³⁾」とあり、東京専門学校に限らずこの時点で多くの私立学校が講義録の刊行を行っていたことがわかる。しかし、それと同時に、「若し学校にて毎日の講義を筆記して、之を出版発売したらんには、人情の常として誰か自ら苦んで講師の講義を聞き、且つ自ら之が筆記の労を取らんとするものあらんや。是に於いてか、懶惰なる学生の如きは、下宿屋の二階に籠城して、空しく貴重の日子を費やすもの比々として之あるに至る、是講義録に依頼するの弊なり。是本と学生の罪なれども、学校に在ても亦深く注意せざるべからざるなり。吾等は学校より講義録を出版するは、学生の為却て害の大なるを信ずるものなれば、これを廃止せんことを望むものなり。⁽⁴⁾」とも指摘されている。これは当時、講義録の受講者である「校外生」だけでなく、実際に学校に通学している学生「校内生」達が講義録で勉強をして学校に行かなくなってしまったという現象が起きてしまったことから、このような弊害が起るのならば、講義録を廃止してしまうべきだ、との論を張るものが現れたことを示している。些か極端な論調であるかもしれないが、少なくともこの文章を寄せた人物にとっては、あくまで「校内生」にとっての悪しき弊を除去するには、結果として講義録受講者の学習の場を削ってもよいと考えていたのであろう。その意味で講義録受講者の立場を低く見る人達が居たことがわかる。

また一方で、早稲田大学の中学講義録で学び、専門部政治経済科二年に編入、コロンビア大学留学を経て後に早稲田大学教授となった高橋清吾は受講当時の様子を「村の人々の中には『講義録学問だ』などと言つて私を嘲ふものもあつたが⁽⁵⁾」と回想している。また、「大抵の学問は『独学自習』することが出来る。通信教授機関の完備してゐる今日では、学校へ通学しなくても、学校では教はるやう

な事柄は自宅で十分学習する事が出来る、否世間でも此頃では学校教育ばかりを万能視しない傾向になつてゐる。これからは益々形式よりも実質が、学校の経歴よりも実力が重んじられる時代だ。⁽⁶⁾」と語られているところをみると、見方を変えるならば、やはり学校教育、さらに学校の経歴がより重視されている状態が続いていたことが示されている。そしてこの学歴・学校歴が重要視される状態は、現在においても少なからず残存しつづけているともいえる。

2. 田中穂積らの講義録経験とその発展

ここでは、田中穂積が東京専門学校／早稲田大学の講義録に対して学習者としてから、担い手としての立場へと至るまでどのように関わっていたのかについて、講義録による学習を終えた後の早稲田大学通学生としての生活についてもふまえながら、検証しておきたい。

* 講義録受講の契機

「田中先生は中学四年の時に、健康を害されて、医師の勧告で学業を途中で廃され、只管療養に勉められた為に、健康を回復されたので、復校しようとしたが、先生の同級生は既に卒業し、下級生が上級生となつて居るので、復校を快とせられず、中学校を退学せられて、独学で勉強をして居られた。時偶新聞紙上で、出版部の校外生募集の広告を見られて、校外生となられ、講義録で勉強をせられるやうになつた。」⁽⁷⁾

このように、とにかく勉強がしたいという欲求があっても、身体的な理由、あるいは地理的・経済的等も含めて困難な状況にある人々にとって学習機会を提供するという機能を担っていた。実際に通学することがかなわないことや独学をしていく中でどのような思いを待っていたのかについてはさらに調査していきたい。

* 講義録をどのように学んでいたのか

田中自身の講義録による学習についての記述を見つけることが出来なかったため、ここでは田中穂積ではなく、他の、講義録を学んだ後に校内生を経て、早稲田大学の教員になった人物の例を示しておく。

高橋清吾は「私は家庭に事情のために中学といふものには一日も行かなかつた。十四五歳の頃は一家の不幸を歎きながらこれではならぬと、真夜中の一時二時といふときに心にむちうつて早稲田の講義を読んだものである。それは今から二十数年前のことである。その頃は肩書万能の時代で正則に学校を出ないものは軽蔑された時代であつた。けれども負けることを嫌いな私は向学の志を棄てなかつた。⁽⁸⁾」と農作業をしながら夜中に学習するという過酷な環境のもと講義録を学び抜いた当時を振り返っている。

* 東京専門学校（早稲田大学）でどのように学んだのか

講義録を受講した後の田中の東京専門学校への入学の過程、および学生生活についての記述については以下のようなものが残されている。

「当時、校外生となつて講義録を卒業したものは、東京専門学校の一学年へは無試験で、二、三学年へは試験詮衡の上入学を許される制度となつてゐた。賢明な穂積は、この道を選んだのである。

明治二十八年四月、穂積二十才のとき、日清戦争は終りをつけ、講話談判が調印されたのであつた。さうしてその年の十一月二十一日、かねて受験してゐた東京専門学校二学年への編入試験に見事合格し、及第したといふ通知を受けることになつたのである。⁽⁹⁾」これは田中穂積の伝記にある記述であるが、文末の資料で示したように、病気のために中学を中途退学し3年あまり講義録の学習を行っている。その後、通学部へ編入するも一年を経たずして卒業を迎えているが、これは講義録による学習の成果が多分に影響している事が伺える。

また、先述の高橋清吾は校内生への編入を遂げてからの学校生活について次のようなことを述べている。「私は英語には骨が折れた。けれども、その他の学課目については、あまり骨が折れなかつた。講義録によつて努力し来つた私には少しく荷が軽かつたやうに記憶する。私は学生達があまりに勉強しないで学生生活だなどと言つて遊んでばかりゐるのを見るとヘンな気がした。⁽¹⁰⁾」校内生になるまでかなりの学習量をこなしていたために多くの科目については苦労はなかつたようだが、一般の校内生達がそれほど勉強熱心でないために違和感を感じていたことを見て取ることができる。

* 田中穂積が行った講義録・課外講義

田中穂積が教育者として、さらには経営者として関わっていた早稲田大学の校外学習活動には大きく分けて二つの学習活動があった。

i: 講義録

主だったものとして、1つは1906（明治39）年～1923（大正12）年の期間において、＜政治経済講義録＞、および＜法律講義録＞という現在でいうところの「政治経済学部」や「法学部」に該当するコースのなかで、『財政学』、『予算論』、『公債論』、『租税論』、『経済学』などの担当科目を執筆している。もう1つは1908（明治41）年～1911（明治44）年の期間においては、＜高等国民教育＞という当時の「大学予科」現在の大学における「一般教養課程」に相当すると思われるコースでは、『経済学』の執筆を担当していたことがあげられる。

ii: 校外教育部

* 1909（明治42）年11月に「早稲田学報」177号で事業内容が公表され、1910（明治43）年5月31日に早稲田大学内で創設、要請に応じて全国各地に早稲田大学の講師を派遣して講習会を開催するセクションであつた「校外教育部」でも田中穂積は積極的に講師としての活動を展開している。ここではそのうちの1つを例示しておく。

「関西に於ける校外教育講習会記 校外教育部幹事 青柳篤恒」＜早稲田学報＞187号1910年9月、

16-17 ページより

◎実業家の多数講習員に得たる神戸の校外教育

我が早稲田大学が時世に鑑みるところあり、今年六月校外教育部を新設し、知識の宝庫たる大学教育を独り校内に限らず之を公開して汎く市民に及ぼし、社会に高等學術の普及を睹るの趣旨を以て、全国各地に講習会開催のことを計画するや、（中略）いくばくもなく京、阪、神の三地方から同時に講習開催、講師出張を請求して來られたので、本大学は坪内雄蔵、浮田和民、田中穂積、服部文四郎の四講師を派遣して其請ひに応じたのである。（中略）神戸の講習会は二十日の午後六時から湊川小学校で開かれた。（中略）此日の講習は浮田、田中の二講師であつて、浮田講師は『新道德論』、田中講師は『生活問題』といふ題であつた。両講師は二十日から二十三日まで四日間、其後二十四日から三日間は坪内、服部の二講師で、坪内講師は『所謂新しき女』と題し、服部講師は『日本最近の金融問題』を提へて各得意の学説を、平易に面白く快弁縦横自在に述べられたのである。

（中略）全講習会員四百五十名の約半数は此等の実務家であつた。序に此講習会の会員の職業別をいへば左の通りである。

講習会総人員 四百四十八人

内女子 三十二人

講習会職業別

銀行会社員 二百人

教育家 百八十九人

内女子 二十九人

官公吏 十二人

新聞記者 五人

雑 七十三人

内女子 三人

我が校外教育の目的はいふまでもなく市民教育である。社会に於ける実務家教育であるがしかし斯くの如く社会各方面の実務家の多数を講習員に得たといふことは、全く従来講習会に余り類例を見ざる異彩といはなければならぬ。

校外教育活動に携わった早稲田大学の教員は、決して田中穂積のみに限ったわけではないが、しかし講義録においては複数の科目を担当し、日本全国各地で開催された校外教育部の講習会への参加を惜しまない様子を見れば、早稲田大学の講義録をはじめとする校外教育活動の中心的担い手であったことがわかる。また、例に挙げた校外教育部の講習会には30人余りの女性や「雑」と記された人々——恐らくは多くは農家の人々と思われる——がどのような思いを持ち学習に参加していたのかについての調査分析は今後の課題としたい

3. 早稲田の講義録に学び／教えた人間として校外教育活動に与えた影響とは何か

田中穂積は早稲田大学の教員になって以降、総長就任に至っても講義録自体ないしは校外教育・大学拡張などのあり方に対する直接的な言及を示しているわけではない。経済学といった田中穂積の専門分野と比肩するようなレベルでの指摘ではなく、当時の状況のなかにあった教育に対する見解と方向性を示している主張は多く見られる。たとえば、「一体学問と云ふものに卒業はないのである、もう是れで学問はしなくとも宜しいなどと云ふことのあるべき筈はない。学問に卒業なきが如くに教育は一生の事業である、我々は最後の息を引取る迄自己の教育自己の修養を忽せにするは出来ないのであります。⁽¹¹⁾」あるいは「元来教育の真の使命はインスピレーションを与へると云ふよりは、寧ろインスピレーションを与へると云ふことに重きを置かなければならぬ。即ち学生に物を教へて知らしめると云ふよりは、寧ろ学生自身に考へさせて自から学問に対する興味を刺戟して、自発的に研究させると云ふことが大切であつて、生命ある教育は必ずこれではなければならぬ。教師が如何に切々懇々有らゆる智識を学生に鼓吹しやうと努力しても、受くる所の学生学生の精力には限度があり、又教師の授業時間にも制限がある。故に与へられた智識が到底消化しきれないで大部分は右から左に忘れられてしまう。即ち詰込主義の教育は無益徒勞に了はるのみならず、寧ろ却て幾多の弊害を醸成する危険がある⁽¹²⁾」などである。

その中でも独学という行為について言及されているところに注目してみると、以下のような指摘をしている。

「毎日一定の仕事に従事して職務大事に努力する傍ら、若干の収入を儉約して講義録の費用に充て、繰合せた時間の余裕を利用して読書に親み、向上の路を辿ると云ふことは、勿論不屈の精神と堅忍不拔の意志を必要とする容易ならざる事柄であるが、併しながら希望に燃え、理想に胸を躍らせる青春意気の澁澁たる時代にあつては、苦中又自ら名状し難き楽みを覚ゆるものである。

平易な道を歩み、安楽の歳月を送るといふことは羨むべきが如くであるが、其实自分自身の本質も能力も発見することが出来ない、寧ろ不幸なる境遇である。両親や父兄から勧められて、小学から中学、中学から高等学校、高等学校から大学と、豊かな学費を支給されて、何の苦もなく煩悶もなく、スラスラと学業を了へる青年は何等の感激もなく回顧もない無味乾燥の生活たるを免れない。即ち此の如き往路を辿る青年は惰性に依つて動いて居るのであるから、兎角無自覚、無反省に陥り易きものであつて一度び人生の波乱曲折に遭遇すれば、周章狼狽すべき策をしらず、折角立派な学問をしなから中道に挫折して、敗残の悲境に陥ることを免れない。⁽¹³⁾」ここでは、時間や収入をやりくりして苦勞して独学で学ぶもの達は、環境に恵まれるままに勉学を勧めてきた人々と違い、自分自身の本質や能力を発見することできるとしている。多少の誇張があるかもしれないが、恐らく田中穂積自身が勉学を積み重ねてきた上で得た実感なのであろう。

「私自身は早稲田大学「政治経済学講義」で勉強した独学者であるが、当時の講義録は現在程行届いたものではなかつた。それでも一つが手に入ると繰返へし繰返へし読んで次号をまつと云ふ状態

であつた。かうして、既に独学自修の精神が動かすべからざるものとなつたのである。私は今日も尚この不撓の精神こそ大成の基であると信じて居る。⁽¹⁴⁾」田中が学んだ当時の講義録は、教員となつた立場から顧みれば十全な教材とはいえなかつたとしても、学習を渴望していた人間にとっては貴重な教材であり、その教材を反復して学習することで揺るぎない精神力が形成されたことが示されている。

「私自身早稲田大学『政治経済講義』の愛読者であつた關係上、独学者に対しては深き理解と同情とを有するものである。古来教育の大本は自学自習「独学」に存すると云ふことは動かすべからざる事実であり、今日文教の刷新、教育制度の改革と云ふも、此の「独学精神」に基礎を有するものに外ならぬ。

元来学問の進歩は外部より強制せらるゝと、自ら進んで学ばんとするのでは、その効果には千里の差を生ずるものであつて、諸君が寸暇を惜しんで独学自修に専心せらるゝは最上の修学法によるものであると云はねばならぬ。然し乍ら凡そ学問の進歩には組織と研究と両々相俟つて進むを必要とし、仮令へ研究のみに努むるも断片的知識を雜然と有するのみでは實際問題の解釈に何の用をも為さぬのである。然るに諸君は本講義により大学に学ぶと等しき系統的知識を得るのみならず、実務の傍ら得たる学問上の原理原則を實際に活用する機会に恵まれて居るのであつて、諸君は招かずして精神の錬磨、人格の修養と共に大学専門教育をも同時に贏ち得るのである。

私はこの指針として早稲田大学『政治経済講義』以上のものはなく、又独学に勝る修学方法はないと確信し、敢て諸君が本講義により精励せられん事を奨めて憚らぬのである。⁽¹⁵⁾」ここにおいては自ら進んで学ぶことは教育の根本であり、早稲田大学の講義録による系統的学習が精神修養とともに大学専門教育を受けられる場であること指摘している。

ここに挙げたものは「内容見本」という、講義録の「宣伝」としての性格を含んで書かれたものであり、すべてが田中自身の主張を反映しているわけではない可能性も勘案しておかなければならないが、その中でもいくつかの力点の置かれた部分を見いだすことが出来る。それは、1：断片的に知識を得るような独学を行うのではなく、系統的学習をすること、2：立憲治下の国民として中等教育以上の教養を持つこと、3：外部から強制されるのではなく自ら進んで学ぼうとすること、4：苦勞して学び抜いたものならば一層立派な人間として大成するであろうということである。

このなかでも、とくに強調されているのは、系統的・総合的に学ぶことの重要性であり、政治経済・法律・文学など幅広く学問知識をカバーしていた早稲田大学の講義録で学ぶこと有用性を強調する結果にもなっている。この当時高等教育への進学率が10%にも満たない状況の中で多くの人々に高等教育レベルの知識を得るべきだとしていること、さらに苦學の後にこそ大きな成功が待っているのだ、と学習者に対して学習意欲の向上を促そうとしていることを見て取ることが出来る。

一方、これに対して早稲田大学総長として田中の前任者であつた高田早苗は、東京専門学校／早稲田大学の講義録も発行に深く関与していたこともあり、講義録について多くの言及を示している。たとえば、「小学の講義録と云ふものはないけれども中学および実業中学と云ふが如き者に比較すべき

中学講義商業講義、其上に高等普通教育、リベラル、エデュケーション（liberal education）と云ふのに当る高等国民教育而して各専門教育の講義即政治経済科法律科文学科と云ふようなものがある。さう云ふ次第で兎にも角にも多くの年所を経過した結果として丁度無形の学校が茲に成り立つて居ると云ふことになった。中学校、実業学校、高等学校、大学校若しくは専門学校と云ふものが建物はないが、紙の上でちゃんと出来上がると云ふ迄に発達した訳である。⁽¹⁶⁾」というように講義録の、ひいてはユニバーシティ・エクステンションの紹介を早稲田大学内外を問わず展開をしていた。

しかし、田中穂積が講義録をはじめとする早稲田大学の校外教育活動に対して関心がなかったわけでない。多くの科目で講義録の執筆に携わり、なおかつ、「早稲田学報」に毎号のように出張の報告が掲載されるほどに地方へ赴き、校外教育部などにおける講演会に登壇していたことからわかる。

さらに、各地域の支部において講義録の学習者が集い、講演会などが催される校外生大会について、「先生（田中穂積のこと：引用者注）は身辺御多忙にも拘はらず、毎年必ず出席して下さつて、一時間半に亘つて、円熟せられた多趣な話術と、該博透徹なる識見とを織り交ぜて話して下さいるので、先生の講話を聞かんとする校外生が、遠隔の地から出席するので、毎会廊下に溢れる盛況を呈する有様であつた。⁽¹⁷⁾」との記録が残されている。ここにおいても田中自身が学んだ講義録などをはじめとする校外教育に対する田中穂積の熱意がうかがい知れる。そしてまた、その田中の熱意に受講者たちがに感化されたかのように田中の講話を聞くために校外生大会に集う様子がみてとれる。勤労青少年に対する教育について田中が具体的にどのような考え方・目標を持っていたのかについてはさらなる課題と考えている。

田中穂積と同じく、早稲田の講義録で学んだ後、早稲田大学教授、さらに総長となった塩澤昌貞は講義録で学んだ後についても「四十年前の校外生など、云ふと何だか古臭いやうですが、私は今尚依然として一介の書生の積もりで独学生活をしてゐます。⁽¹⁸⁾」としている。

また、高橋清吾は「私はこの頃いろいろな処に講演に行くが、決して学校教育を重要視するやうなことは言わない。いな言へないのである。イヤイヤながら学校に通ふ人と一定の仕事に従事しながらその余暇に真剣に勉強をする人とをくらべて見ると、知識の吸収力は後の方が遙かに強く且つ大きいのである。なんと云つても意気込が異ふ。努力が異ふ。自尊心が異ふ。

私はつねに母校の学生諸君にも言つてゐる。知識は独学でも得られるといふことを。これは私の体験が実証するのだから間違ひはない。⁽¹⁹⁾」と述べている。

まとめ

本稿においては、田中穂積をはじめとして、高橋清吾、塩澤昌貞ら独学で学びつづけるという行為に対して多大な価値を見出した結果、それがその人達の職業、つまり研究という職業につく人達に焦点が当たることになったと言う点で、事例としては極端すぎる面は否めない。しかし、田中のいう「不撓の精神」は田中穂積ら研究者に限らずとも、過酷な生活の中での独学によって講義録を学び抜いた市井の人々が身につけていったであろうことは想像に難くない。

これからの課題としては、田中穂積らのような一部の突出した、ともすれば例外的にも見えてしまう人物についての分析・検証にとどまらず、一般の受講者たちの多くの声などもふまえながらさらに当時の社会的状況に照らし合わせつつ、市井の人達がどのように自らの学習活動をその後の彼らの人生に活かすことができたのか、についても考察を深めていきたい。

- 注(1) 菅原亮芳「明治期における「学び」と進学案内書」菅原亮芳編『受験・進学・学校 近代日本教育雑誌にみる情報の研究』学文社 2008年、181ページ
- (2) 「早稲田大学出版部小史(二)」<早稲田大学史紀要>第4号 1971年3月、より「校外生(講義録購読者)数一覧表」参照
- (3) <教育時論>223号 1891年6月25日 開発社 9ページ。
- (4) 同前。
- (5) 高橋清吾「向上の青年諸君へ」『早稲田中学講義 内容見本』1935年10月-1936年9月 1ページ。
- (6) 高橋清吾「独学で早大教授になる」『早稲田中学講義 内容見本』1933年10月-1934年9月 1933年9月2日発行 27ページ。
- (7) 東清重「田中先生と校外教育」『田中総長追想録』故田中総長追想録並伝記編集室 1946年、18ページ。
- (8) 前掲「向上の青年諸君へ」1ページ。
- (9) 『田中穂積 (伝記・文集)』田中穂積先生伝記刊行会、1948年、43ページ。
- (10) 前掲「向上の青年諸君へ」2-3ページ。
- (11) 「卒業生とお別れに際して-第四十五回卒業草書授与式に於ける祝辞-」<早稲田学報>5月号 (399号) 1928年5月、2ページ。
- (12) 「我が学園の学制改革」<早稲田学報>4月号 1932年7月、3ページ。
- (13) 田中穂積「処世の鍵論」<早稲田>十月号 1933年10月、2ページ。
- (14) 「独学で成功した人々」第六十九回『政治経済講義 内容見本』1936年4月-1937年9月 15ページ。
- (15) 田中穂積「独学を奨む」第七十回『政治経済講義 内容見本』1936年9月-1938年3月 1ページ。
- (16) 高田早苗「大学教育の普及に就て」<早稲田学報>175号 1909年9月、2ページ。
- (17) 前掲『田中総長追想録』19-20ページ。
- (18) 『早稲田中学講義 内容見本』1933年10月-1934年9月 1933年9月2日発行 27ページ。
- (19) 前掲「向上の青年諸君へ」3ページ。

*なお、早稲田大学講義録の「内容見本」について、発行日が判然としないものがあり、今回はその内容見本が提示している学習期間をその発行時の目安として注に記載した。

参考文献

早稲田大学大学史編集所編『田中穂積先生生誕百周年記念一記念行事概要・追悼・略歴・著作目録・展示目録一』1976年。

資料

田中穂積 略歴

明治九年二月十七日

長野県更級郡川柳村(現長野市)石川二四四番地に、田中周之助・ゆうの長男として生まれる。田中家は、幕末には名主を、明治初年には副区長をつとめるなど、村政には功労があり、周之助は、郷党の有志に算数を教え、多数の門下生を有し、また、明治二十四年 四月二十九日に大地主議員に当選するなど、土地の名家であつ

	た。穂積には姉りく・いと・さと、妹かつ、弟周がある。郷里の川に因み、後年聖川と号する。
同十三年	隣村の塩崎尋常小学校に入学する。後、高等科に進み、優秀な成績をあげる。
同二一年	松本中学校に入学する。
同二四年	肺ジストマのために咯血し、治療のため一時上京し、北里柴三郎博士の治療を受ける。このため、松本中学校を学業中途三年にして退学し、以後3年有余の間、生家で療養しながら東京専門学校講義録で独学に励む。
同二八年	十一月二十一日、かねて受験していた東京専門学校二学年への編入試験合格の通知を受け、二四日、同校に入学のため上京する。次いで、一二月、三学年の編入試験に合格する。
同二九年	七月一日、東京専門学校邦語政治科を卒業する。卒業の後、研究科へ進み、また、東京日日新聞の経済財政記者となる。八月二七日、徴兵検査を受け、乙種合格となる。
同三十四年六月	早稲田大学留学生として欧米諸国に派遣される。
同三十六年六月	米国コロンビア大学より Master of Arts の学位を授与される。
同三十六年九月	帰国。
同三十七年九月十日	早稲田大学講師に嘱任され、経済学と財政学を担当する。
同三十九年七月一日	同大学部商科教務主任に嘱任される。
同四十年四月四日	社団法人早稲田大学社員に選任される。
同同 五月四日	同大学教授に嘱任される。
同四十一年五月	組織改正の結果財団法人早稲田大学維持員に選任される。
同四十三年十一月廿四日	法学博士学位を授与される。
同四十四年五月一日	早稲田大学大学部商科長に嘱任される。
大正四年八月十四日	同大学理事に選任される。
同六年六月十二日	同解任。
同七年十月十八日	同大学理事に再選され、引き続き理事となる。
同九年四月一日	同大学商学部長に嘱任される。
同十年九月	同大学より教育制度視察のために欧米諸国へ派遣される。
同十一年七月	帰国。
同十二年九月三十日	同大学商学部長辞任。
同十三年十月四日	同大学常務理事に再選される。
昭和六年六月廿三日	同大学総長に就任。
同 七月	文政審議会委員となる。
同七年十二月	日本学術振興会創立委員となり、創立後引き続き理事となる。
同十年十一月十日	教学刷新評議会委員となる。
同十二年十二月	教育審議会委員となる。
同同十二月十五日	教学局参与となる。
同十四年一月四日	貴族院令第一条第四号により貴族院議員に勅選される。
同十九年八月廿二日	永眠（享年六十九歳）

『田中穂積（伝記・文集）』 田中穂積先生伝記刊行会、1948年、および早稲田大学大学史編集所編『田中穂積先生誕生百周年記念一記念行事概要・追悼・略歴・著作目録・展示目録一』1976年、より作成。